

会話における性差 —— エスノメソドロジーの視点から

品川恵美（一九九五年度卒・文化学原論ゼミナール）

はじめに

私が「会話における性差」をテーマにして論文を作成しようと考えたのは、私自身が女性と会話をするときよりも、男性との会話において、自分の意見を言いくいということを感じていたからである。なぜ男性が相手だと自分の思っていることをきちんと伝えられないのだろう。何年か前までは、私が男性に対して遠慮をしすぎていたからなのだと思う。つまり、たんに個人的な問題だと考えていたのだが、大学三年生のゼミで、「日本において、女子のしつけには、『言葉遣い』が非常に重視され、男子よりも敬語、丁寧語を多く使わなければならないということを教えられる。これは女性に対して自己主張を和らげることを要求している」（井上輝子『女性学への招待』）との指摘を知って、私の疑問は個人的なものではなく、女性全体の問題として考えられるのではないかと気がついたのである。

この論文では、会話において本当に女性が自己主張しづらい事実があるのかどうかを探っていきたい（制限枚数の関係上、章の一部分を抜粋する形となった）。

第1章 エスノメソドロジー登場以前の研究史

第1節 饒舌

私たちの社会では、一般に女性のほうが男性よりおしゃべりだということが広く信じられているが、学術的研究の結論はこうした思い込みと矛盾する。会議、パネルディスカッション、夫婦の会話など、様々な状況において、男性のほうが女性よりやく喋ることが証明されている。話す量からすると女性のほうが少ないにもかかわらず、なぜ女性はおしゃべりだと見なされるのであろうか。スペンダーはこの理由を、男性は喋る権利をもっているが、女性は黙っていることが期待されているので、少しでも女性が喋るとそれがおしゃべりと感じられるのではないかと推定している。ところで、おしゃべりという言葉はあまりいい意味で使われない。話の内容が軽いか、くだらないということを示すことが多い。これが女性のほうに多く使われるということは、女性は取るに足らないことを話題にするという臆断が根底にあるからではないかと考えられる。というのは、女性と男性は異なったことを話題にする傾向が実際にあり、男性の話すことがおおむね重要視さ

れているからである。政治、自動車、スポーツといった男好みの話題が重大であると見なされる一方で、子育てや個人関係といった話題が価値が低いものというレッテルがはられやすい。このことは男性がすることは重要で、逆に女性がすることはくだらないとする社会的価値判断の反映であるとも言えるのではないだろうか。

(第2節 略)

第3節 会話における話す順番の交替——重複行為と遮り行為

ジンマーマンとウエストはカリフォルニア大学のキャンパスで交わされた31の二人間の会話をテープに録音した。その内訳は、二人の女性の会話が10、二人の男性の会話が10、女性と男性の会話が11であった。彼等は会話を聞き取って、そこに見られる不規則性、つまり、話す順番の交替がスムーズに行われなかった場合を調べてみた。その結果、彼らは男性同士の会話と異性間の会話では、非常に大きな違いがあることを発見した。彼等が見出した二つの不規則性が重複行為と遮り行為である。重複行為は次の話し手が現在の話し手が話し終わる前に、最後の言葉を重複させて話し始めることである。これに対して、遮り行為は次の話し手が現在の話し手が話している最中、最後の言葉と定義できないような時点で話し始めてしまう現象である。遮り行為は会話の調和を乱すだけでなく、現在の話し手が話し終わるのを妨げると同時に話す順番を奪い取ってしまう機能を持つ。

この会話分析の結果が6・1と6・2の表である。6・1は同性間、6・2は異性間で行われた会話の結果であるが、この二つの表は重複行為、遮り行為とともに完全な対立を示している。6・1

は最初の話し手と二番目の話し手がほぼ同数ずつ重複・遮り行為を行っているが、6・2は重複・遮り行為とも、圧倒的に男性が女性に対して行っている。さらにここで注目したいのは、6・1の同性同士の会話では遮り行為が合計7しかないのに、6・2の異性間では遮り行為が合計48と異常に多いことである。このことは男性同士は互いに遮り合うことはまれで、遮り行為を行うのは女性と話しているときであることを示している。つまり、男性は女性の話す権利を侵害しているという結果が出たのである。逆に、女性が遮り行為を男性との会話において行わなかったという事実は、女性が遮り行為を男性に終わる権利を侵さず、話し終わるまで待つように心がけていることを示す。

表 6.1 20 の同性同士の会話に見られた話す順番における不規則性

	最初の話し手	2番目の話し手	合計
重複行為	12	10	22
遮り行為	3	4	7

表 6.2 11 の異性間の会話に見られた話す順番の交替における不規則性

	男性の話し手	女性の話し手	合計
重複行為	9	0	9
遮り行為	46	2	48

第2章 エスノメソドロジの視点からの会話分析

はじめに 性差別的エスノメソドロジとは

エスノメソドロジとは、日常的な行為状況から、その中に潜む権力や、差別現象を見ていこうとする研究方法である。これは言語学とは異なり、会話の特定内容や言語自体を研究するのではなく、いかなる方法で人々が言葉を用いて他者とともに行為しているのか、すなわち、会話の相互作用による現象を研究する。この研究では、男らしく、女らしく振る舞うから、男女間の日常的な権力現象が起こるという考えを絶対的とは見なさない。すなわち、エスノメソドロジは、「らしさ」という教え込まれた知識が、必ずしも行為に反映するとは限らないということを前提としているのである。以下では、日本でのエスノメソドロジにおける会話分析を紹介し、日常的な会話の中で性差があるのか、また、男女は会話の中でどのように影響を及ぼし合っているのかを考えてい。

第1節 江原由美子・好井裕明・山崎敬一による会話分析(大学の男女)

第1項 質問・応答に関するテクニク

質問・応答を最も素朴に考える場合、質問は問う側から見ると、相手に対する発話権の譲渡であり、相手はそれを質問として理解したとの証左として応答する義務を負う。しかし、現実の会話場面では、質問・応答に関する様々なテクニクが用いられる。

分析の結果、男性は構造化された質問を多く用いるという結果

が出た。構造化された質問とは、あることを自分が直接話し出すのではなく、相手からの問いかけに応答するという形で展開できるように自らが会話を操作していくテクニクを指す。つまり、自分の言いたい事柄について相手が質問するように仕向けていくのである。

データ1(略)は男性同士の会話であるが、彼等は「大学でのサークル活動」をテーマに話し合っている。男性M1は、この直後に彼自身が述べたい話題すなわち「所属するサークルが特定の女子大と提携した場合に生じる様々な問題や体験」を長く展開している。データ1の一段目の質問が、そのための「準備の問いかけ(Preliminary Q)」に相当する。これに相手が応答することでサークルの提携という話題を両者が共有し、その結果、四段目で男性M1が、相手から「どっかと提携なさって……」という彼が本場に展開したい話題陳述を許容する質問がなされ、それに応答することで発話権を完全に得ているのである。こうしたテクニクを用いて、男性は自然に会話を誘導することが多い。

対照的に、女性の会話で典型的に見られたのが「あるストーリーの流れで生じる質問・応答」である。これは、一方があるトピックを陳述するとき、それに関する質問を相手が連続的にしていき、その質問(Q)に対する応答(A)のかたちで陳述が進行するテクニクである。

データ2(略)では、まず女性F2が「自分は女性に憧れることが多い」というトピックを提示する。それに対して相手は矢継ぎ早に関連する質問をしていく。その結果、F2が各質問に回答していくうちに、トピックが展開するのである。この場合、女性

F2が女性F1に対して行う質問は、相手から発話権を奪うわけでも、先述した、「構造化された質問」のように、自己のトピックを陳述するための場を作る機能を果たすでもない。それは、相手の陳述がよりスムーズに進行し、トピックがより活発に展開するためにプラスに働く、一種の「支持作業」と考えられる。

質問上応答について以上二つのテクニクを明示した。前者は会話誘導の装置であり、後者は会話勧誘の装置である。そして、事実として、前者を会話の中で男性が多く用い、自分の言いたいことをごく自然にしゃべれるようにしていたことが分かる。

第2項 あいづちについて

データ3は、女性Fが男性Mのトピック展開に対して行った「あいづち」の例示である。男性Mは大学で所属しているサークルの話を続けており、女性Fが「あいづち」をうっている。これは確かに相手の男性のトピックに興味を示し、その進行を支持し手助けをする機能を果たしている。その証拠として、女性Fは3段目で相手のサークルの性質について積極的に質問している。これは明らかにプラスに機能する「支持作業」である。

次に、同じ男女が別のところで行っている会話を見てみよう。データ4では、今度は女性Fのほうがトピックを展開し、発話権を行使している。彼女は、サークルをかけもちして大学生活をおくることがいかに大変であるかを話そうとしている。男性Mが行う「あいづち」は一応、話は聞いていることを示しているが、実際のところ、彼女が展開するトピックにはほとんど興味がないことを相手の女性に伝える働きをしている。その結果彼女は、6段目の時点で自分のトピックは相手の男性Mにとってもおもしろくな

データ [3]

「あいづち」の例示 (女性→男性)

- 1 { M: それで~そのうち僕は駒場で1年留年したら 高校の時の友だち あの、が
F: うふ
- 2 { M: 子供会 駒場子供会ってのがあるのね。それで、おまえどうせ暇なんだから
F: ああ え~え~
- 3 { M: 来いって ひきずりこまれて うん、まあ 子
F: Q→A.
あのボランティアみたいなの?
- 4 { M: 供に遊ばれているという で、それが結構今まで尾をひいているという感
F: え~え~
- 5 { M: じで
F: ふ~ん

「あいづち」の例示 (男性→女性)

- 1 { M: ん あ
 F: 3つ入ってたでしょう とても授業まで手が回らないという状況でっていう
- 2 { M: そう
 F: か そう それで去年はまだ2年生だったから良かったけど、今年は3年で
- 3 { M:
 F: やっぱし執行部をもつということになるとね 両方とも～小さいけど at home
- 4 { M:
 F: な、しっかりしたクラブだからあ ふ ふ テニスの方も あ～マネージャー
- 5 { M:
 F: っていうこは、やめたんです、もう だから、かねあいとか あ そうね いろ
- 6 { M: Silence (5.0) まあ何かむかしは、子供会もちっちゃかったみ
 F: いろありますね
- 7 { M: たいなんだけど～〔略〕
 F:

いものと判断し、それ以上続けることをあきらめ「沈黙 (Silence)」が生起する。「沈黙」の後、男性Mは自分のサークルの組織や役割分担についてトピックを新たに始め、会話の主導権を自分のほうに転換していく。これは明らかにマイナスに作用する非「支持作業」である。

こうした事実、男性は進行中の会話の展開に意を注ぐことが少ないのに対して、女性は会話の進行それ自体によけい気を配っていることを示している。男性は、相手のトピック展開に対して非「支持作業」を行い、女性は「支持作業」を行う。女性の会話進行それ自体への配慮が、女性特有の「気配り」「たしなみ」として世間に流布されると、これは日常的な権力装置が、人々に「見える」かたちで役割化され、制度化されている端的な性差別現象といえるのではないだろうか。

第3項 沈黙 (Silence) ニらこ

会話における沈黙をいかに規定するかは、非常に難しい。表面的に見れば、会話場面での一時的な発話の欠如であり、会話の中断である。だがこの定義は誤解を招く。確かに「沈黙」は誰も話していない状態であるが、決して何ものかの欠如ではない。明らかに様々な意味を持つ会話の相互作用の形態である。「沈黙」は、それ自体一つの十分有意義な現象であり、様々な現実を作り出す「行為」であると考えられる。

データを検討する中で、会話の流れに支障をきたすことはほとんどない「自然な」生起基盤を持つ「沈黙」と「不自然な沈黙」が見出された。権力作用に関係するのは不自然な沈黙のほうなので、ここではその不自然な沈黙について見ていきたい。不自然な

沈黙とは「相手のトピックに対する関心の欠如を示す沈黙」のことである。すなわち、現在話している人のトピックが、相手にまったく興味を引き起こさない場合、表面的な質問を一、二度するとしても、相手はその後、まったく質問や支持作業をせず、共同的な会話達成作業が欠如するために起こる沈黙のことである。この沈黙は、現在の話し手がそれ以上話し、トピックを展開することを積極的に中止要請する機能を持つ。つまり、沈黙するほうの権力行使である。そしてこの沈黙は、男性が女性に対して典型的に起こしている。これは、女性が会話達成をする権利を奪う権力装置であり、男性の女性に対する微細であるが強力な差別的事実にはならない。

第4項 割りこみについて

割りこみとは第1章で説明した遮り行為と同じ現象と考えていただきたい。もう一度簡単に説明すると、割りこみとは、いま話している人が話し終える前に次の話し手が話し始めることである。ここでの分析結果においても、男性の女性に対する割りこみの数は圧倒的に多かった。このように女性が日常生活で常により多く男性に「割りこまれて」いることは重大な意味を持つ。なぜなら男性は「割りこむ」ことで、巧みに女性の話の内容や行為の可能性を剝奪し、制限を加えていることになるからだ。これを男性が女性に対して行うことが、なんらかの形で日常的に保証されている事実は、極めてゆゆしき「女性差別」現象と言えよう。「女性差別」は、制度的、社会構造的次元のみならず、常に日常的次元まで浸透した根深い問題をはらんでいる。

(第2節 以下略)

第3章 新しい観点からの会話実験

第1節 第1章と第2章の検討と疑問点

第1章、第2章をふまえて、次に問題にしたいのは、どんな場面でも女性は脇役に回るのであるうかという疑問である。もし自分にとって重大な問題で一歩もゆずれないような場面であれば、あるいは、自分がよく知っているお得意の分野であれば、男性に発言権を譲ったり、あいづちを打つ側に回ることも少ないのではないだろうか。性差も会話行動を制御するときの手がかりの一つではあるが、唯一のものではなく、年齢や社会的地位の上下の手がかりが使える場合には、こうした社会的関係のほうが優勢になるのではなからうか。内田伸子はこのような視点から、初対面の男女にある話題を与えて会話をしてもらい、そこでの会話行動を観察した。

(第2節 略)

第3節 実験結果

第1項 会話行動に見られる性差はどのようなものか

「割り込み」では、これまでの研究結果と同じく、男女差が有意であり、男性のほうが女性より多く割り込みを行っている(表3・①(略))。

「沈黙の修復」においては男性が女性より多く、男性が女性に対してのほうが女性が男性に対するときよりも多いことが明らかになった(表3・②(略))。会話に関する意識調査において、男性の解答の中に「相手が退屈したり疲れたりしないように気を付ける」という記述があり、男性のほうが「沈黙」を何とか修復し

たいと気を配っていることが伺われる。これは先行研究の知見に反する結果である。

「敬語・丁寧語」は女性が男性に対して、男性は男性に対して多く使用している(表3・③「略」)。これらの表現は相手との心理的距離(遠慮・礼儀)の表現である。また会話意識調査においても、女性は相手が男性のときに心理的距離を感じており、「自分が女性であることを意識している」との内観が得られ、一方、男性は「相手が女性だと下手に見られないように気をつける」という内観が得られている。よりカジュアルな表現である「強調(なんか)」が女性同士の場合に男性同士よりも多く出現する(表3④「略」という結果と併せて考えると、女性は女性同士のほうが気楽に話せるが、男性はむしろ初対面の男性に心理的距離を感じるようである。

以上のように、「割り込み」のみ先行研究を追認する結果を得た。しかし、この項目以外は、性別により出現頻度がどちらか一方の性に偏るというわけではなく、男女とも会話進行に気を配り、心理的距離に応じた表現の使い分けをしていることが明らかにになった。

第3節

第2項 会話の生産性を左右するのはペアか話題か

この実験では、一つ目に軽い話題として東大入学式に現れた奇抜な新入生を揶揄した写真誌『フォーカス』の記事と二つ目に真面目な話題として朝日新聞の社説で男女生み分けについての問題提起をした記事を用意して、被験者に話し合ってもらった。そこ

で、①話題に中心化した会話が展開しているか、②評価できるような一定の結論を出したか、③対話者の貢献度は対等かという三つの基準(各10点満点、計30点)に基づき実験者三人で独立した会話を評定して得点化した(表5)。その結果、「生み分け」のほうが「入学式」よりも点数が高く、話題の内容が真面目なものになった。また、「入学式」では男性同士と女性同士の会話には差が見られず、異性の対よりは得点が高くなる。また「生み分け」では女性同士が最も得点が高く、異性の対がこれに次ぎ、男性同士が最も低いということになった。これは、話題への関心度が得点に影響を与えることを示している。

表5 会話の生産性のペア別得点の平均

(分散)

話題 ペア	「入学式」	「生み分け」
男性対女性	17.3 (7.1)	18.6 (6.5)
男性 同 士	19.8 (9.0)	16.3 (6.7)
女性 同 士	19.8 (7.6)	22.5 (3.8)

第4節 社会的地位の上下関係による会話行動の相違

相手がどういう社会的地位にいるかが分かるテレビの対談番組「徹子の部屋」のビデオを、上記の男女の会話実験と同様の手続きで分析した。

結果を概括すると、目下の相手には、「割り込み」が多くなる。また発話の順番を取ってしまうのは対談相手が目下の場合にのみ生じた。

対談相手が目上の場合には、「敬

語・丁寧語」が圧倒的に多く、また間接的(婉曲)表現が多く、相手との心理的距離を言語表現によって表そうとしていることがうかがえる。

最初に予測したようにインタビュアーは対談相手の性よりも相手の社会的地位や年齢によって話し方を変えていることが明らかになった。

第5節 第三章のまとめ

この章の実験の結果、次のことが明らかにされた。会話行動を規定しているのは自分と相手との心理的距離の部分が大い。この心理的距離は、自分と相手との社会的関係の判断に基づいて決定されるといってよい。特に相手が初対面の場合は社会的関係の判断は、相手の年齢、服装、雰囲気、肩書などに基づいてなされるが、それらの差が明確な判断基準にならないときには、性差も基準の一つとしてクローズアップされることになるのである。

研究結果について内田は次のように分析している。「話し手は『平等に話している』という意識をもっているわけではなく、相手との社会的関係によって会話での表現を意識的に制御している。性役割観や自己意識、相手が自分をどうとらえるか、経験を通して獲得した自分の会話技能に関する意識、すなわち、自分はいっどう振る舞い、それが相手にどのような印象を与えてきたかというように、絶えず自己の会話行動をモニターしているのである。」

さらに、会話権を発動するのは男女にかかわらず、会話で取り上げられている話題が自分にとって重要であるかどうかによって

左右される。また、会話に熟達していない相手や目下に対しても発動しやすい状況が生じる。しかし、一般には男性が社会的競争場面におかれる経験の頻度が高いということから、割り込みなどを一種の「社会的技能」として、無意識的ではなく、「意図的に」使うことによって、会話を有利に運ぼうとすることが多いとも考えられる。

以上が内田伸子らの研究結果である。会話行動が、性別だけでなく、社会的地位や心理的距離によって、より大きく左右されるという意見は納得できる。しかし、疑問点が一つ浮かんだ。それは会話行動はすべて意識的に行われるのかどうかというものである。この疑問をもとに第4章では、意識と会話を構成する規範について考えていきたい。

第4章 「性差別のエスノメソドロジー」再考

(第1節 略)

第2節 「沈黙」における複数の規範の存在

ここでは、エスノメソドロジーの観点から、沈黙の問題を手掛かりにして、複数の規範が錯綜し、行為者がそれらの複数の規範にさまざまな仕方に関連的に行為しなければならぬ状況が存在することを示そうと思う。

その前に、「規範」の定義をしておきたい。一般的には、「物事を判断したり、行動したりするときの、従わなければならない基準または規則」という意味で使われる用語だが、ここでの「規範」は「会話が構成される時の規則」としておく。

データ1(略)と2(略)を見ていただきたい。相手の意見や

評価に対して自分が相手と一致しない意見や評価を持つとき、「直接相手の意見や評価に反発することによって相手の対面を傷つけてはいけない」という「礼儀性」の規範が場面の中で焦点化する。このとき、自分の意見や評価の表明は、沈黙をはさむことによって遅れて示される。このように、「評価」―「非同意」の場合、当人たちの直接の意図とは無関係に、沈黙が多くなるのである。これは会話における習慣化された構造規範といえよう。

ところで、「評価」―「非同意」が必ず沈黙を生み出すかといえばそうではない。例えば、お世辞の場合、「礼儀性」を考えると、「評価」―「同意」のほうに沈黙が生じやすい。「きれいだね」という「評価」に対して「はいその通りです」と「同意」をすると、「自分で自分のことをほめてはいけない」という日常規範に反することになるので、「そう……そうかしら」と沈黙をおいて「同意」する。逆に「非同意」の場合は、「いいえ、そんなことはないわ」と即答できるのである。しかし、これが心理的距離が近い、すなわち親しい人が相手だと反応が違ってくる。「きれいだね」―「でしょう?」「まあね」のようにお世辞の場合でも「評価」―「同意」で即答できるのである。

このように、「評価」―「同意」/「非同意」には、「礼儀性」という規範があり、その中の沈黙は男女とも形式化された構造をともなっていることがわかる。しかし、その「礼儀性」における沈黙の構造は絶対的ではなく、文脈や話の内容によって、また、会話者同士の「親しさ」によって、常に変化するのである。

次に、初対面の相手の意見や評価に対して自分の意見や評価が必ずしも否定できない場合にも沈黙が生じるということについて

考えたい。こうした場合の沈黙は、男性同士の会話データでよく見られ、女性同士の会話データではほとんど見られない(データ3・4(略))。

ここで注目したいのは、こうした場合の沈黙が、否定的な評価の場合と違って、なんら特有の形式化された構造を持たずに生じていることである。この結果から見えて考えられることは、初対面の男性会話者は、沈黙を意識的になくそうという行動をしないということだ。その理由は、同性だからいたずらに親しさを示そうとする必要がないからなのか、沈黙に気を使わずに会話をしているからなのか、この沈黙をすることが男性の会話パターンなのか、あるいは他に原因があるのかどうかは今の段階では分からない。ここで言えることは、男性の沈黙は、必ずしも相手の評価に対して否定的な意見を伴うわけではないということである。

今度は女性同士の会話を見ていきたい(データ5(略))。男性同士の会話とは対照的に、F2の発話で始まった評価連鎖は、次々に新しい評価連鎖を生みだし、継ぎ目のない連続的な会話が行進している。相手の意見や評価に対する自分の意見や評価は、ほとんど間隔をおかずに繰り返されていく。こうすることで、会話は互いに「親密さ」を積極的に示しあっていると考えることもできる。こうした会話が女性同士に多く見られたということは、女性同士の会話の場合には、互いに面識がない場合にも、女性であるということから互いに対する「親密性」を提示することが要請される可能性があることを示唆する。

このように会話の中での「沈黙」一つを取ってみても、文脈によって、あるいは状況によって、行為規範が設定され、慣習化さ

れた構造が会話の中に存在することがわかった。この構造は、会話が無意識に従っているものと言つてよいであろう。さらに、男性同士の会話と女性同士の会話の沈黙の差異というデータは、男女それぞれ同性同士による会話規範の違い（男性の相手の評価に対して否定的な意見を伴わない沈黙の存在と、女性の会話中に沈黙をなるべく引き起こさないようにする傾向）を示している。

第3節 第4章のまとめ

会話における男女の言動の差異は、性別だけを原因として説明できるものではない。文脈の規範、形式化した構造、慣行的行為、状況、社会的地位、心理的距離、その他諸々の要因が複雑に機能し合っているのである。「言語活動は多様で混雑的だ。いくつもの領域にまたがり、物質的でも生理的でも心理的でもある。さらには、個人的領域にも社会的領域にも属している。それは人間にかかわる現象のいかなるカテゴリーにもおさめることができない。その一体性を導き出すことができないからである」とソシュールは述べている。会話は一つの規範で決定されるものではないのである。しかし、だからといって、会話の中の性差が消えるわけではない。沈黙においては男女それぞれによる会話スタイルが違い、割り込みや話す時間の長さにおいては、男性が女性よりも優位な立場にいる。このような実験結果は、会話を構成する様々な要因においても男女が平等に自己主張することが困難であることを示している。

これは、社会的領域における通念が大いに関係していると私は思う。たとえば、女性は男性よりもおとなしいほうが女らしく、

聞き役に徹していることが好ましいとする社会であれば、絶対的ではないにしても、その考えが何らかの形で会話に影響を及ぼすことは間違いないと思われるからである。さらに、社会的地位を考えると、これが高い人ほど発言権を得やすく、会話を支配する傾向がある。男性の方が圧倒的に多く、社会的地位に就いているという現状から見れば、会話や言葉（丁寧語など）に性差が現れるのは当然かもしれない。このように、ある社会で共有されている女性観や、男女がおかれている社会の現状と会話は密接不可分であり、相互に影響し合っているのである。

会話における性差は、言葉や会話を改善すれば解決するというものではない。文化的性役割（ジェンダー）や、女性が社会的地位につきづらいう状況が要因になるなど、さまざまな問題が伏している。女性を差別したり、排除したりする言葉や会話の見直しも必要だが、時として女性を弾き出してしまふ男社会の仕組みをなんとか改善しなくては真の解決にはいたらないのである。

おわりに

「女性が強くなった」と言われて久しい。けれどもそれは、「男性より強くなった」あるいは「男性と対等になった」という意味ではない。「女性は、以前よりも自分の生き方に自由を求めて、自己主張し始めた」と解釈するほうが正しいであろう。

話し手よりも聞き手のほうが会話の流れを正確に把握できるように、長い間、男性の聞き役として静かに社会を眺めてきた女性は、時代の流れに敏感になれる。社会の表舞台に立つ男性には気がつかない問題を提起できる可能性を持っている。性差や差別の

問題は、差別している側からは気がつきにくい。差別されている側から指摘しなければ、何も始まらないのである。

女性に必要なのは、聞くという姿勢を大事にしなが、粘り強く自分の意見を主張していくことではあるまいか。そして男性には女性の意見を聞く姿勢をもっと持ってもらいたい。——これが以上の考察から引き出される教訓である。

【主要参考文献】

井出祥子 一九八二『言語と性差』『月刊言語』一一巻一〇号

大修館書店

入谷敏子 一九八三『言語心理学のすすめ』大修館書店

内田伸子 一九九三『会話行動に見られる性差』『日本語学』一

二巻一六号(五月臨時増刊号) 明治書院

遠藤識枝 一九八七『気になる言葉』南雲堂

山崎敬一 一九九四『美貌の陥穽——セクシュアリティのエス

ノメソドロジー』ハーベスト社

山田富秋・好井裕明 一九九一『排除と差別のエスノメソドロ

ジー』新曜社

Cotter, Jennifer. (1986) *Women, Men and Language*. Long-

man. = 1990 吉田正治訳『女と男のこぼれ』研究社出版

Spender, D. (1980) *Man Made Language*. Routledge &

Kegan Paul. = 1987 れじのるす・秋葉かこ訳『こぼれは

男が支配する——言語と性差』勁草書房

Smith, P. M. (1985) *Language, the Sexes, and Society*.

Oxford. = 1987 井上和子・河野武・正宗美根子 共訳『言語・性・社会——シリーズ21世紀の言語学』大修館書店

Lange, B. S. (1978) *Soziolinguistik* 第二版 Kohlhammer. = 1990 原聖・糟谷啓介・李守 共訳『社会言語学の方法』三才社

コメント

川本隆史

この研究ノートは、品川恵美さんの卒論をまとめたものである。テーマ選択の動機は本人の説明のとおり、まさしく「個人的なものは政治的！」という第二波フェミニズムのスローガンを地で行っている。研究ノートにしては少々不均り合いな枚数になってしまったが、彼女の探究の過程を示すのも大事かと考えて、一部の図表をカットした他はそのまま掲載する。「聞くという姿勢を大事にしなが、粘り強く自分の意見を主張していくこと」という結びの主張は正論であるが、もう少し突っ込みがほしかった。なぜこんなコメントをするかという、本年一月三日に行なった私のゼミ卒論発表会で、金井淑子先生が最後に次のような感想を述べられたのが印象に残っているからだ。すなわち、女性的なアプローチを使っての論文は、どうしても結論部分に紋切型の決意表明が付け加えられることが多い。「これからは自分で決める、納得できる生き方や進路を自分で決定する……」といった具合。品川さんの場合も期せずして「自分の意見を主張する」で結ばれる。だがその場で金井先生が鋭く問われたように、「自分で〇する」のいうときの《自分》というものがどこまで分かっているだろうか。その分かりにくさをステレオタイプの言い回しでゴマカすようなことがないように注意する必要がある。これは品川さんだけへの注文ではない。